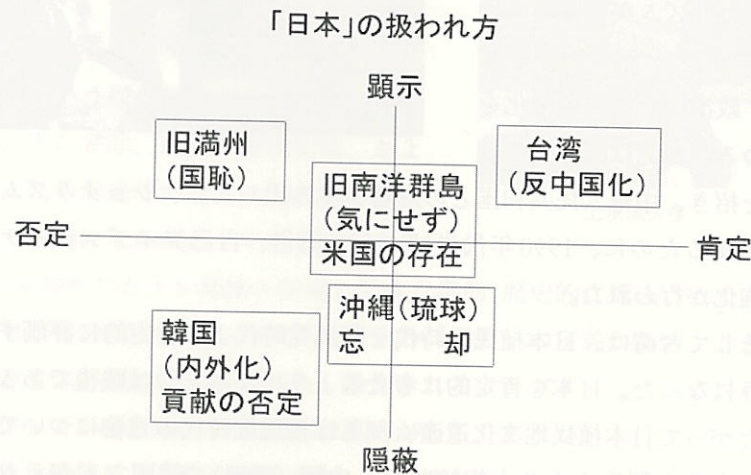


植民地「日本」の扱われ方



地日帝残滓に否定的ではあるが、最近、地方では地域の文化遺産として意識して保存する傾向があり、変わりつつあると述べた。

3) 「台湾は捨て子」

黄智慧氏はあらためて地理的位置を見て、台湾島は東アジア列島弧の中ほどにあって、東北アジアと東南アジアの接点を占め、アジアとオセアニアの境界にもあたっていると言う。国家が存在しない時代には、まさに人集団が南北・東西を往来する時に必ず



黄 智慧

通過する要点である。近年大量に出土した考古学資料によって、無文字時代が非常に長く続き、人集団による活動がきわめて豊富だった痕跡が明らかにされている。本講義では、考古学上の新発見、古地図の解説、漂流記、探検記などにに基づき、この島における人集団の生活の歴史を認識し直すものである。

驚かされるのは、台湾島に人集団が存在した時期は、琉球列島における古人類の活動年代と相応するほど古い。旧石器時代にはすでに人類の活動が認められ、新石器時代になると多種多様な文化が異彩を放つに至った。17世紀以後に台湾西部地域が国家の歴史の時代に入って、以降は、外からの人口移入、先住民との通婚で文化の混成が始まった。20世紀初期の段階でも、先住民を対象とする征服戦争はなお続き、先住民はアジアで最後に征服された民族（また、征服を最後まで拒否し続けた）であった。

そして「植民地」「戦争」という要因により、台湾では突如として大規模な人集団の移動が起こった。20世紀後半になりやっと民族の構図が安定した。考えてみれば、先住民、ホーロオ（和佬）人、ハッカ（客家）人、日本内地人、外省人という台湾の5大エスニック・グループは、この100年の間にそれぞれ異なる起源地から人集団と文化的特質を持ち込み、アジアで類例を見ない文明スタイルを織りなすことになった。

そもそも、台湾人は中華民族の末裔もしくは傍系なのか、それとも全く新しいタイプのアジア人種なのか。この新しい民族のつぼは、東北アジア・東アジア大陸、東南アジア、オセアニアの島々の文化的特質を兼ね備えており、また野性的なものや古文明的要素が混在している。台湾は、今なお発展を続けるアジア文明の実験室にほかならない。ここで人（集団）という本来の視点に立ち返って、台湾の文化を

認識し直していただき、国家という視点に囚われることなく、アジア文化の可能性を考えていただくことを希望している。

歴史経験という点では、他のアジア諸国と同じく苦難を強いられた。しかし、植民地を経験したアジア諸国（韓国、北朝鮮、ベトナム、フィリピン、インドネシア、マレーシア、シンガポールなど）が第二次世界大戦後すべて解放の喜びを味わい、新興国として独立したのに、台湾だけはなお独立を達成していない。それだけでなく、20世紀半ばに起きた中国の内戦がなお終結に至らず、中国は台湾に対する領土的野心を抱き続け、統一を国家の核心的利益と見なしている。アジア諸国の中で台湾と韓国だけが戦争の暗い影をなお脱しきれていない。台湾を国際的孤児という逆境に置き去りにした根源は、「植民地」「戦争」の二重苦を残した20世紀の歴史の中にある。

現実の国際政治ルールにあっては、台湾は仮想的（バーチャル）な存在でしかなく、のけ者であるがために、外部による理解を難しくしている。ただ、近代国家の歴史は台湾的観点に立てば非常に短いもので、人類の歴史全体の中では文字のない歴史時間の方が文字に記された歴史時間よりもはるかに長かった。それ故に、台湾とアジアの関係を理解するには国家の観念を超え、さらに文字に書かれた歴史の束縛から脱することが必要であり、人（集団、エスニシティ）の観点に立ち返って考える必要がある。

日本と国交がない世界の国々を数えるには、おそらく5本の指でこと足りるであろう。そのうちの2か国は、日本の隣国にあたる北朝鮮と台湾である。前者が世界でも最も反日的、後者が最も親日的なのは皮肉であるが、国交のない国としては一様に処遇されることになる。2か国とも引越しのきかない隣国という地理関係にあるから、日本

はこれからも否応なしに対応してゆくほかない。

台湾と国交のない国は日本だけではない。世界の国の総数は、政治の実態にとどまるものを除き195ほどであるが、国連に加盟していないのは2か国だけで、一つはバチカン、もう一つが台湾である。前者は「神の国」であるから世俗組織に加わる必要はない。台湾は国連創設当初からの加盟国であり、安保理の常任理事国でもあったが、1972年に脱退し今に至っている。以後数十年は医療、民間航空、世界遺産など種々の国際組織の活動に参画する手だてを失い、国名を掲げてオリンピックに出ることもない。

それでも23か国が台湾と国交を結んではいるが、そのほとんどが中南米とオセアニアの国々であり、アジアはゼロである。国際政治の場で台湾という国は世界の捨て子、アジアの捨て子と言うべき存在である。勿論喜ばしい状況だとは言えないにしても、台湾には揺るぎない自負がある。国としての存在感で言えば、台湾の国際貿易量は世界18位、国内総生産（GDP）は26位、2300万の人口は世界の上位（48位）であり、アジアではいずれもさらに上位となっている。